

企画3 人の移動と国際文化
コメント

コメンテーター 玉野井麻利子

Mariko TAMANOI

●カリフォルニア大学、
ロスアンゼルス校人類学部教授
(文化人類学)

パネリストの方々の発表を聞きながら考えたテーマは「故郷」です。

でもその前にちょっと私の専門である人類学の話をして。人類学では「動いている人」——つまり「移民」——を研究対象とするようになったのはかなり最近のことです。それまでは「動いている人」は「文化と文化の間」の空間にいる、と考えられていたようです。もっとも「移動」が文化の一部となっている人々、たとえばジプシーとかベドウィン族とかは昔から研究対象でしたが。ところが「移動」というのは太古から人間の歴史を特徴づけているわけです。今改めて「移民研究」が活発になってきているのは、世界のグローバル化に伴って人々が「遊牧民化」してきたという認識のもとでおこってきているのでしょうか。こうしたコンテキストで「故郷」を考えると、「生まれ育ったところ」「そこに帰るところ」というより、自分がある場所を選び、そこに「作る」ところの「故郷」と考えたほうがいいのではないのでしょうか。

知念さんのお話にあった世界中のウチナンチューが、とある機会に沖縄に「帰って」くる、これも一時的にはあれ、彼らが沖縄に故郷を「作る」ことができるからではないのでしょうか？ 彼らは沖縄にこれから住むわけではなく、再び今自分が住んでいるところに帰っていく——そしてそこも彼らが「作った」故郷なのではないのでしょうか？ 沖縄で心の栄養をもらい、一時的な故郷をつくる、その心を持って、今住む故郷に戻っていく、そういう「動き」が人生となっている、そういう気がします。

そういう私自身も「遊牧民」です。アメリカと日本をこの30年近く行ったり来たりしながら、今ではどちらが故郷なのかわからなくなりました。どちらでもいい、どちらにも故郷をつくっているのだな、という気持ちがあります。

これが恵まれた立場なのか、あるいは「故郷を持たない寂しい人たち」の部類に属しているのかどうかわかりません。ただ故郷を「作る」ということはその条件さえ許されれば誰にでもできることだと、少なくとも思いたいです。

ところが今の福島状況は誰も、いかに望んでも、故郷を作ることができない、そうすることが生命の多大な危険を伴う、というまさに未曾有の状況を、自然ではなく人間がつくりだしてしまったのです。福島という物理的な土地と環境を再生するということは気が遠くなるぐらいの時間がかかってしまう。こうした状況を作り出した責任は東電や日本政府にくわえ、原子力に頼ってきた私たちひとりひとりにもあるのです。さらに、東北という地に頼り切ってしまった私たち消費者、お米、労働力、さまざまな零細部品工場、こうしたことを考えると阪神の復興とはまったくちがった復興が東北には必要ではないでしょうか？ 福島の人たちがどこかに故郷を作ることができる、そんな日が一日も早く来ることを願ってやみません。